

前進座公演



山本周五郎 || 原作 田島栄 || 脚色 十島英明 || 演出

やなぎばしものがたり

音照装
粟田義雄
栗木健子
寺田琢磨
越瑳知人
田村隆
小野文惠
佐藤琢人

柳
わらわ
ゆく
よる

「待つてゐるわ」 そのひと言が
おせんの一 生をきめた

生きることのきびしさと
愛することのかなしさと――

江戸・下町を舞台に

ひたむきに生きる若者たちを
詩情ゆたかに謳いあげる

山本周五郎の

珠玉の作品

待望の再演!!



秋田演劇鑑賞会 第149回例会

日時：2019年12月4日(水)

会場：秋田市文化会館 大ホール

お問合せ：TEL 018-800-6250

開演 18時

(開場は開演の30分前)

FAX 018-836-3176



庄吉
中嶋宏太郎



幸太
渡会元之



おもん
浜名実貴



おせん
今村文美



忠村臣弥



藤井偉策



上滝啓太郎



早瀬栄之丞



横澤寛美



小林祥子



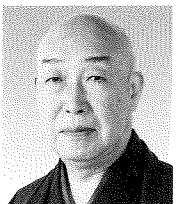
西川かずこ



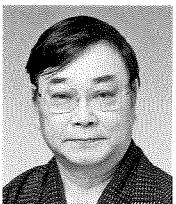
前園恵子



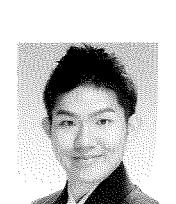
武井茂



津田恵一



志村智雄



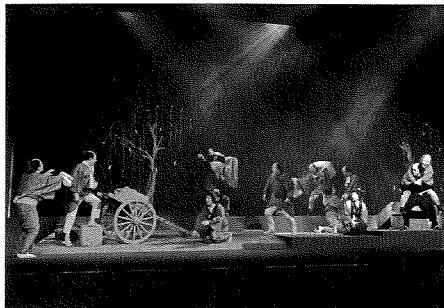
和田優樹



嵐市太郎



有田佳代



庶民の生きるための苦しみも悲しみも、喜びも楽しさも、すべてが「ここ」にある。苛酷な運命と愛の悲劇に耐えて、人間の真実を貫き、愛をまつとうした江戸庶民の恋と人情を描いた山本周五郎の名作が今、よみがえります。

あらすじ

江戸茅町にある杉田屋の大工・幸太と庄吉は、どちらも腕も良く人柄もいい。研ぎ職人の源六の孫娘・おせんは、どちらにも近しさと親しさをもつていた。

だが、杉田屋の跡取りは幸太に決まり、失意の庄吉は上方へ修行に旅立つ。別れ際、「一人前になつて帰るまで待ついてくれ」と、おせんに言い、「待つていてるわ」と、咄嗟に答えたそのひと言が、おせんの運命を深く左右してゆく。その後、杉田屋からおせんを幸太の嫁にほしいと言つてきたが、杉田屋との過去のいきさつから祖父の源六は断つてしまふ。

間もなく源六が卒中で倒れる。そうしたある日、江戸は大火事に見舞われる。火の手は、おせんと源六の家にも迫ってきて……。

●「ひと言」の大切さをあらためて考えさせられた。人間のみが獲得した「言葉」。いつときの心の高ぶりから発したであろう「待つていてるわ」のひと言で、おせんは自らを縛ってしまった。言葉は人の心を、ほんのひと言で操ることができるということができる。権二郎は、人のウワサに尾ひれをつけて吹聴し、それを信じた長屋の面々は手の平を返したように、おせんを見下す。一方、朴訥な語りにじんわりと情けを感じる、源六のひと言もある。

17才の心もとない純なおせんは、数々の苦難にみまわれながらも真実にたどり着く。おもんは何不自由ない暮らしからどんな底の生活をしいられても、誇りう。助けあう二人の姿になぜかジーンとさせられた。

柳
弓
物
記

題字 朱海慶

感想文（前回の公演より）

●山本周五郎さんがご自分の体験されたことをもとに作品を書かれたとのことで、舞台にもその様が良く表れていました。今も昔も市井で暮らす者は、災害と貧困に人生を狂わされ、つらい生活の中に小さな幸せを見つける。この物語に登場するおせん・おもん・幸太・庄吉たちも、それぞれが普通のささやかな幸せを夢見ていたはず……。どの人生にも「自分ならどうしだろう」と深く考えさせられるものがある。